

「セトモノとセトモノとぶつかりっこするとすぐこわれちゃう。どっちかやわらかければだいじょうぶ。やわらかいところをもちましよう。そういうわたしはいつもセトモノ」。ACジャパン（公共広告機構）のテレビCMで読まれる相田みつをさんの詩です。この詩と一緒にテレビ画面に映し出されるのは、横断歩道を渡る人混みのなかで、疲れ切ったサラリーマンが、すれ違い際に肩と肩をぶつけるというシーン。冷静に考えればお互い様。しかし、片方の男性は「どこ見て歩いてんだよ！」と言わんばかりに、相手を睨みつけようと振り向きまします。すると、彼の目に入ってきたのは、間髪入れずに、誠実に、穏やかな面持ちで頭を下げながら謝っている相手の姿。それ見た男性は、ハッと自分の心のゆとりのなさに気付かされたかのように、頭を下げるのでした。CMの最後に、キャッチコピーが流れます。「街の機嫌はこわれやすいものだから。おおらかな気持ちでいることも、りっぱな公共心です」。相手の愛の光によって、自分の心の闇が照らされる、そういうことがあるように思います。

聖書に、「神は、その独り子〔イエス〕をお与えになったほどに、世を愛された」（16節）とあります。しかし、これほどの愛を世は受け入れなかったとヨハネ福音書は語りまします。なぜなら、世の光として来られたイエスを受け入れることは、自分の心の闇、悪い行いが「明るみに出される」（20節）ことを意味しているからです。人は誰だって、自分の思いや行いが的外れであったことを認めたくはありません。しかし、それを恐れて、「光〔であるイエス〕の方に来ない」（20節）者は、「既に裁かれている」（18節）とイエスは語りました。光に背を向けて、自分の欲望の赴くままに生きようとする人間の悲劇は、自分の行っている悪が悪であることを見分けることができなくなることであり、それ自体が自らを滅びに招く裁きであると捉えているからです。

何より、イエスが世に受け入れられなかった最大の要因は、「世を愛された」ことでしょう。「世」には、「私」だけでなく、自分の憎むべき相手、あの犯罪者、あのテロリストも含まれているからです（マタイ5:45）。牧師であったボンヘッファーは、自分を迫害するヒトラー政権下の秘密警察に監視される中、こう説教しました。「もし私が自分の憎むべき敵のためにも、御子が与えられたのだということを信じないとするならば、私もまたこの神の愛から墮ちる」。憎しみに満ちている時にこそ、彼は自分の心に従うのではなく、神の愛を宣言しました。そこにこそ、「一人も滅びないで、永遠の命を得る」（16節）道があると信じたからです。主イエスの十字架の愛の光に照らされて、「そういうわたしはいつもセトモノ」と感じつつ、しかしそれ故にこそ、「やわらかい心」が養われ、世の光として輝ける者でありたいと願います。

（文責：望月達朗牧師）

